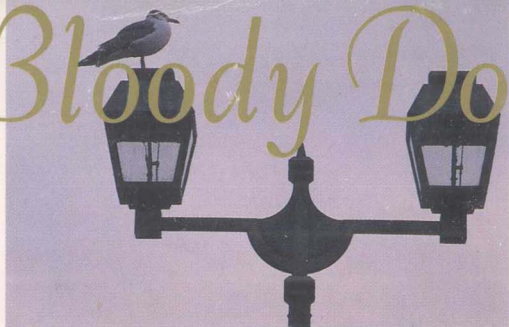


Bloody Doll



秋霜^{しゅうそう} 北方謙三

角川文庫

しゅう そう

秋霜

きたかたけんぞう
北方謙三



角川文庫 8042

平成二年十月二十五日 初版発行
平成四年十一月三十日 五版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話 編集部(〇三)三八一七―八四五―

営業部(〇三)三八一七―八五二―

〒一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——旭印刷 製本所——多摩文庫

装幀者——杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛に
お送りください。送料は小社負担でお取り替えます。

定価はカバーに明記してあります。

©Printed in Japan

しゅう そう
秋霜

北方謙三



角川文庫 8042

1 落日

めずらしい名前のホテルだった。

海べりのリゾートという感じだが、街からそれほど離れてもいない。

私は、車と一緒に画材や荷物もベルボーイに任せた。おかしい扱いはしないだろう、ということは、ベルボーイの挙止ひとつを見ても大抵わかる。世界じゅう旅行をして、数えきれないほどのホテルに泊まってきた。

この街に入ってから、玲子^{れいこ}はちょっと気分を悪くしたようだった。なぜなのかは、わからない。シートに身を沈めたまま、身動きひとつしなかったのだ。

一度だけ、明確な意志を示したのは、シティホテルへ車を入れようとした時だった。眉^{まゆ}を寄せ、首を激しく横に振った。

仕方なく、私はシティホテルをやりすごし、市街を抜けて、海沿いの道を走ってきた。旅館くらいなら、見つかるだろうと思ったのだ。これほどのホテルがあるとは、想像もしていなかった。

玲子も、このホテルに拒絶反応は示さなかった。
「続き部屋が欲しい」
^{スウィート}

フロントで、私は言った。海の絵。しばらく滞在するには、恰好かつこうの場所かもしれない。「セミ・スウィートなら御用意できます。リビングとツインベッドルームの組み合わせでございます」

フロントクラークは、初老の穏やかな眼をした男だった。私は頷うなずいた。

「御予定は？」

「それが、はっきりしない。少なくとも、三日ばかりはいてみようと思っているが」

「それでは、九月十四日の御出発ということにしておきます。一応の御予定ということ
で」

「船は借りられるかね、ここで？」

「御自分で、操縦もうりゆうなされる船でございますか？」

「いや。乗せて貰もらうだけさ。沖の海の色を見たり、陸地を眺めたり」

「それでしたら、むかいのヨットハーバーにクルーザーがございます。クルーがおりますので、御不自由はかけないと思います」

頷いて、私は宿泊カードにサインした。名前を見て、フロントクラークはかすかに笑みを洩もらした。誰だれでも知っているというわけではないが、絵が好きなら私の名前はわかるかもしれない。

「御案内いたします」

ベルボーイが、キーを握って先導した。

四階までしかない。部屋数も、百あるかどうかというところだろう。

四階の、左端の部屋だった。窓が二面に開いていて、海とヨットハーバーが見渡せる。ベルボーイが、バスルームや非常口の説明をして出ていった。

「いいホテルだ。なかなかのものだね」

玲子は、窓際に立って海を眺めていた。私が言ったことが、聞えたようではなかった。私は、バスルームへ行き、きちんと湯が出るかどうか確認した。外国を旅行すると、こういうことが習慣になる。

チャイムが鳴った。車を任せたベルボーイが、キーと一緒に荷物を運んできた。

「車は、駐車場に入られて、一番右の列の三番目です。そこが、潮風の少ない場所です。で」

「ありがとう」

チップを渡そうとしたが、ベルボーイは受け取らなかった。

「従業員の教育もいいようだ」

「そうね」

玲子は、まだ海を眺めたままだった。九月の海。すでに穏やかではなくなっている。どこか冷たそうでもある。

「気分は？」

「大丈夫。ごめんなさい」

「謝ることはないさ」

「旅行に行きたいって、あたしから無理に言い出したのに」

「私ぐらいの歳になると、これぐらいの運転がちょうどいい。東京から、三時間というところだったかな」

スピードを出すような歳ではなかった。百キロほどで、静かに走ってきた。

「運転、あたしが代ればよかったんだけど」

「おまえの運転は、無茶すぎる。助手席で胆を冷やすより、ハンドルを握っていた方が楽さ」

クローゼットのハンガーに、上着をかけた。かすかに、潮騒が聞えてくるようだった。東京を出たのは、昼食を摂ってからだった。もともと、目的があるわけではない。この方向を選んだのも、玲子の気紛れのようなものだ。私は、海があればいい。それから、玲子がそばにいればいい。

「先生、バスをお使いになる？」

「そうだな」

「あたし、流してあげるわ」

「おいおい、勘弁してくれよ」

「せっかく、旅行に来たのに」

「そんなことを、愉しむ歳でもなくなっているのさ。それより、おまえがさきにバスを使

った方がよさそうだな。ジャグジーがついてる。気分がよくなるかもしれんよ」

ソファに腰を降ろした。調度も悪くない。高級品が並べてあるわけではないが、色合いや質は充分に吟味してあった。

私のそばに、玲子が腰を降ろした。

「なんだね？」

玲子の唇が動きかけたのを読みとって、私は言った。

「いえ」

「気分が悪いんじゃないのかね？」

「先生、やさしすぎる」

「若さがない分、男はやさしくなっていくものさ」

「やさしすぎるって、残酷なことよ」

「ありふれた言い方だね」

「そうよね」

かすかに、玲子が笑った。

前にも、同じような会話を交わしたことがある。やさしいということとは、少し違うのだ、とその時は言った。人の弱さも醜けずさも、みんな受け入れようという気分になっている。人が生きるといふことを、こよなく健けん気なものだと思ふようになっていく。そういう年齢なのだ。そう言った。

玲子と会ったのは、一年前の夏だった。

友人が催した還暦のパーティに、手伝いというかたちで、玲子はやってきていた。友人の行きつけの店の女の子で、その店のママも含めてほかにも四人来ていた。

友人は、なぜか玲子だけを私に紹介した。時として気難しくなる私を、玲子ならうまく扱うだろうと考えたのかもしれない。

二十歳そこそこの女の子の、御機嫌をとるほど、私は元気でもなく、生々しい人間らしさも残していなかった。その一年半ほど前、三十年以上も連れ添った妻を死なせたばかりだった。自分の生も、もうすぐ終るのだらうと、なんとなく思っていた。

玲子は、私のそばに立っていただけだ。ホテルのパーティ会場は、冷房が効きすぎていて、私はなるたけ冷たい風を避けるようにしていた。すると玲子は、そういう場所へ、さりげなく私を導くのだ。

なんとなく心が和んだ。そう表現すればいいのだろうか。

十日ほど経って、私は玲子のいる店へ飲みに行った。飲むのはほとんどホテルのバーで、銀座のクラブなど、年に一度か二度、人に連れられていけばいい方だった。

私の姿を認めて、玲子はびっくりしたように立ちあがった。憶えているかどうか。そう思って顔を出した私には、意外な反応だった。

あまり言葉は交わさず、一時間ほど飲んだ。知り合いの小説家が入ってきて、席が賑やかになった。それでも玲子は、静かに私の隣りに腰を降ろしていた。

四度ほど、その店に通った。

君の絵を描かせて貰もらえないか。そんなことを言つて、女の子を口説くどいた経験が、私にもないわけではなかった。画家の常套じょうとうてき的な口説き文句だ。玲子に、それは言わなかった。静かに、飲んだだけだ。妻を死なせてから、女体に遠ざかったという氣遅れが、私にあるわけではなかった。もともと、臆病おくびょうな方でもない。

玲子をそばに座らせている。それだけで、私は満足していたようだ。

五十八歳という年齢が、すでに老境なのかそうでないのか、私自身にはわからなかった。人は、私を老人とは扱わなかった。ただ、玲子への接し方は、老人のそれだったという氣もする。

画商が、私の作品展をあるデパートで開催した。なにがなんでも、自分の絵を売りたいという氣を、私は失いかけていた。会場にも、それほど出かけていかなかった。

たまたま、別の用事でデパートのそばを通りかかった。ついでという感じで、私は会場に顔を出した。

ベニスの夕暮を描いた絵の前に、玲子が立っていた。私には氣づかず、十分ほどそこに立ち尽していた。私が、一番氣に入っている絵だ。夕暮。建物のシュリエット。赤と黄色の雲。

人生の夕暮を、私は妻を失うことによって、他人よりも早く感じはじめたのかもしれない。

ふりかえり、私の姿に気づいた玲子は、びっくりしたようにうつむき、頭を下げた立ち去ろうとした。呼びとめていた。

さみしい絵をお描きになるんですね。

短く、玲子はそう言っただけだった。

食事に誘った。成行のようなものだった。

行きつけのレストランで、ワインは好きかと訊くと、玲子は素直に頷いた。一九七五年のシャトー・ラトゥール。ラベルを見て、玲子は低く声をあげた。若い女の子が、ワインの見分け方を知っているのは、私にとってはちょっととした驚きだった。

玲子と親しくなったと思ったのは、その時からだった。

時折、食事をしたり、電話をかけ合ったりし、やがて当然の成行のように男と女になった。

抱いたあと、かすかな罪悪感に襲われた。私ははじめて、玲子に対して持っていた感情が、娘に対するものと似ていたのだ、と自覚した。

私には、子供がいなかった。

娘がいたなら、私は最初から自分の感情のありようを理解して、決して玲子を抱くなどという真似はしなかっただろう。

「もうすぐ、陽が落ちるわ」

ぼつりと、玲子が言った。

私は、窓の外の海に眼をやった。沖の方は、斜めからの光線でまだ輝いている。
「早くバスを使つてきなさい」

頷いて、玲子が立ちあがった。

黒い髪。黒い服。玲子の服の趣味は、黒と白だ。いまは、白がベルトだけだった。
ベッドルームへ入っていく玲子の後ろ姿から、私は窓の外の夕暮の海に眼を移した。

2 海の絵

夜半に、眼が醒めた。

玲子は、ベッドにいなかった。遠い潮騒しおさいと入り混じって、人の声が聞える。リビングの電話で話しているようだ。午前二時。眼を閉じ、私はもう一度眠ろうとした。

玲子を、独占しようという気はなかった。男がいるかもしれない、という気配を感じたこともある。嫉妬しとどに悩まされるということとはなかった。嫉妬で自分を忘れるほど、私は若くはなかったのだ。

男がいるなら、それもいい。玲子とその男を好きだと言うなら、私は黙って身を退ひくしかないだろう。

達観たっかんしているというわけではなかった。諦めあきらめ。どこかに、それに似たものがある。妻を死なせてから、人生はどうせこの程度のものだと思うようになった。

低い話声は、いつまでも続いていた。眠りは訪れてこない。なにか、困ったことでも起きているのか。もしそうなら、いずれは相談してくるだろう。私にできるのは、多少の金を都合してやることぐらいだ。たったそれだけ、という気もするが、世の中のかんりの部分のことは、それで解決できるのだということも、知りすぎた年齢だった。

玲子には、金を渡したことはなかった。銀座のクラブをやめさせようとしなかったし、広くて居心地のいい部屋を用意してやろうとも思わなかった。時々、欲しそうなものを買ってやったくらいだろうか。

その気になれば、贅沢な生活をさせてやるのも、不可能ではない。それを玲子が望んでいると感じたら、とつくにそうしていただろう。

玲子が、なにを望んでいるのか、私にはよくわからなかった。わからないまま、男と女になり、穏やかな関係を続けてきた。

話声が熄んだ。

遠い潮騒だけが、しばらく私の耳に聞えていた。なにかに懐しさを感じる。たとえば波の音とか、風にそよいで音をたてる木々の枝とかに、時としてたまらない懐しさを感じてしまう。自分の生の終りの時。それが近づいていると、そういうことでなんとなく思ってしまう。

五分ほどして、玲子がベッドルームに戻ってきた。

「眠れないのかね？」

声をかけた。ベッドに入りかけた動きを、玲子は一瞬止めたようだった。

「ちょっと電話をしたの。東京のお友だち。店が終って、部屋に帰ってきている時間だろうと思ったから」

「そうか、電話をしていたか」

「ごめんなさい、起こしちゃって」

「ちょっとしたことでも、眼が醒める歳になったのかな」

「そっちへ、行っていていい？」

「ああ」

私は、少しベッドの端へ^{からだ}軀を動かした。玲子の軀が、滑りこんでくる。冷たい軀だった。抱き寄せると、玲子は私の胸に顔を押しつけてきた。

「悪い子なの、あたし」

どういう意味でそう言ったのか、私にはわからなかった。玲子は、胸に顔を埋めたままだ。

「先生、あたしを嫌いにならないで」

「そんなことはないさ」

東京でなにかあったのか、訊きかけて途中でやめた。必要な時は、玲子の方が言うだろう。どんなことにせよ、詰問のような口調になるのを、私は恐れていた。

「眠りなさい」

かすかに、玲子は頷いたようだった。

それから一時間以上、私は眠れなかった。玲子のたてる軽い寝息に、じっと耳を傾けていた。眼醒めたのは、私の方がさきだった。

シャワーを使い、髭を当たった。髭にも白いものが混じっているが、頭ほどではない。さっぱりすると、私はブルーのシャツに紺のズボン穿いた。私の年齢にしては、色が派手すぎる。死んだ妻にも、いつも言われていたものだ。色だけは、自分が好きなものでないかぎり、身につけようという気が起きてこない。

玲子は、私の色の好みを、かわいいという言葉で表現した。そういう言い方が、私は嫌いではなかった。

朝食は、ルームサービスをとった。

ペランダのテーブルに食器を並べ、私は潮騒に耳を傾けた。バスロープ姿の玲子がやってくる。

昨夜のことは、なんにも言わなかった。

海に眼をやって、ものうそうにコーヒを啜っている玲子を、私はぼんやり眺めていた。モデルを見る眼とは違うだろう。娘を見る眼とも、違うはずだ。こういう時間が、私の至福の時と言ってよかった。

氷の彫刻のように、いつかは溶けてしまうものであっても、いまひと時は、静かにこうしていたいと思う。少なくとも、私の方からそれを毀そうという気はなかった。

「いい天気だわ、今日も」

「昼間は、まだ暑いだろうね」

「泳ごうかしら、あたし。プールはまだやってるみたいだし」

「水着、あるのかね？」

「ちゃんと準備してあるわ。そのへんは、先生と違うんだから」

「玲子か、泳げるとは知らなかったな」

「大抵の子は、泳げるわ。もともと、あたし海のそばで育ったんだし」

「ほう」

家族のことや、生まれた土地のことを、玲子は喋ったことがなかった。具体的ではないにしろ、大抵は会話の端に出てきたりするものだが、それもなかった。

考えてみれば、玲子が過去のことを喋ったことは、ほとんどない。

「海を見ると、なんとなく泳ぎなくなっちゃうの」

「海は、もう無理だろうな」

「そうね。波は冷たくて荒いし、それにクラゲがいるわ」

「プールで泳いでも、陽に焼けるよ」

「小麦色の肌って、お嫌い？」

「いや、季節はずれだと思ってね」

低い声で玲子が笑い、トーストにバターを塗って差し出した。